特集 はこまち対談

Part 17

歴史を知り、歴史をつくる

若山社長　五島軒にて

若山 直（わかやま なお）さん

株式会社 五島軒 代表取締役社長 66 歳

今回は、函館を代表する老舗レストラン五島軒の若山直社長に、携わってる活動や函館への思いについてお聞きしました。

丸藤：　いつも、まちセンを使っていただきありがとうございます。

若山：　歴風会（函館の歴史と風土を守る会）、伝建（函館市伝統的建造物群保存会）、それと豆記者交歓会などで利用しています。あと、十字街商盛会の歳末福引でも（笑）

丸藤：　どれも子どもたちや、地域との結びつきが強い活動ですね。

若山：　豆記者交歓会は、小学校５～６年くらいの子どもたちが年４回、受入れてくれる都市にホームステイしながら、豆記者として取材活動をするというものです。まず北方領土を見て、沖縄や豊川を訪問し取材活動をします。最後は東京です。国会議事堂を見学したり、皇居を訪ねて皇太子ご夫妻から一人ずつ声を掛けてもらったりもするんですよ。もっとも、子どもが主役なので、私達大人は立って見てるだけですが（笑）

丸藤：　活動の切っ掛けは？

若山：　活動自体は、沖縄の早期本土復帰を願い、本土と沖縄を結ぶ青少年親善活動の一環として始まりました。

　まず沖縄からの豆記者を受入れる都市として函館に呼びかけがあり、歯科医であった故杉本力夫さんの尽力により、函館でも発足したんです。私は、その杉本さんが病気になり活動できなくなったのを引き継ぐかたちで行うようになりました。

丸藤：　子どもたちにとっては、良い経験になりますね。

若山：　その土地の歴史や文化や人々の生活習慣にふれることは、とても貴重な経験です。その土地土地で取材し、直接目で見、肌で感じたことを新聞としてまとめています。子ども同士の友情も深まりますね。

丸藤：　歴風会や伝建の活動は、西部地区との結びつきが強いですね。

若山：　歴風会は、函館の歴史ある建物や懐かしい景色を守るための活動です。函館の由緒ある建物を写真や映像で残したり、子どもたちに興味を持ってもらう活動や、チャリティーパーティーを開催して街並み基金を集める等の活動をしています。

　伝建の方は、街並みを保存するための条例づくりがきっかけで活動を始めたものです。こちらは、五島軒の先代、若山徳次郎が行っていて、それを引き継ぎました。

丸藤：　函館の魅力とは？

若山：　異国情緒の街並みと言うでしょ。でも、ただ外国の教会が集まっているだけでは異国情緒とは言わない。そういう中に、日本のお寺とか八幡宮とかがあって、初めて異国情緒なんです。日本古来の仏教的なものや神道等の中に溶け込んだ形で異国のものがあって差別もされない、というのが異国情緒なんです。函館は、そういう意味では国内でも稀有な例なんですよ。

丸藤：　異国のものを、当たり前のものとして受入れてきた。

若山：　五島軒の歴史にからめて言うと、初代コック長五島英吉は戊辰戦争に巻き込まれ、その残党狩りから逃れるためハリストス正教会に匿われていました。その後の日露戦争の時は、ハリストス正教会はロシアの教会なんだけど、函館で信者が苦しめられたということもありませんでした。これは凄いことです。

丸藤：　なぜそのような風土が生まれたのでしょう？

若山：　蝦夷地だから、幕府の目が届かない。それに、ご先祖がバラバラでしょ。私自身も、母方は淡路島の人で高田屋嘉兵衛と一緒に船大工として来ましたし、父方は鴻巣です。どこから来た人も分け隔てなく一緒に助け合いながらまちづくりをしていかなくちゃならない。そういう土台があって外国人が入って来ました。異国の者に違いないし、国の援助もないけど、ひと旗あげたい。そういうまちだったんですね。

丸藤：　観光のまちとしては、どう考えてますか？

若山：　いつから全国区になったかというと、私は１９８８年の青函博覧会が切っ掛けだったと思います。五島軒もビアレストランを出しました。のべ９０日間。まあ人は入らなかったよね（笑）ところがね、あれで観光の人たちが目からうろこが落ちた。作り物のパビリオンを観せるよりも、もとからあった街並みの方が評価が高いと分かったんです。

丸藤：　それで、景観を守る意識も強くなった。

若山：　たまたま、ハリストス正教会の隣に１３階のビルを建てようという動きがあり、反対運動が起きました。冗談じゃない、景観がぶっ壊れてしまうと。なんでも建てればいいというもんじゃないとなり、条例もできました。

丸藤：　市民レベルでも動きだしてきたんですね。

若山：　やはり残るべきものは、本物です。単に観光客がどっと来ればよいというものではありません。函館の教会だって、信者が維持管理していて本物だから胸を打つわけでしょ。函館は、テーマパークの中にある作り物とは違うんです。

丸藤：　これから大切なことは？

若山：　経済の活性化はもちろんだけど、歴史を大切にし、これからの歴史をつくっていかなくちゃなりません。函館は、青森から見ると北の果て、札幌から見ると南の果てと思われていました。大間原発の問題もそこにあります。函館は確かに、中央や県庁所在地ではない一地方都市です。だからこそ、様々な垣根を取り払って交流していかなくちゃなりません。縄文時代は、今よりずっと交流がありました。その頃から３～４千年たってますが、ほとんど進んでいません。

丸藤：　その中で、まちづくりセンターに対してのアドバイスをお願いします。

若山：　利用率は上がってますよね。地域との結びつきなども、あせらないでやっていって欲しい。あと、高齢化率が高くなってきているので、それに応じた活動も期待しています。

丸藤：　ありがとうございます。お隣同士なので、これからもよろしくお願いします。

〈聞き手〉 函館市地域交流まちづくりセンター
センター長　**丸藤 競**